

氏名（本籍）	<small>ナガヨシ ケイタ</small> 永吉 敬太（鹿児島県）
学位の種類	博士（経済学）
学位記番号	甲 経第18号
学位授与年月日	平成26年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
論文題目	人間開発概念再考による貧困分析の再構築 —国連開発計画の人間開発の概念とアマルティア・センのケイパビリティ・アプローチとの“乖離”に関する研究—
論文審査委員	主査 有山道夫 教授 副査 生見哲郎 教授 副査 竹内規浩（元鹿児島国際大学大学院教授）

内容の要旨

永吉敬太君の論文題目は、「人間開発概念再考による貧困分析の再構——国連開発計画の人間開発の概念とアマルティア・センのケイパビリティ・アプローチの“乖離”に関する研究——」である。

序論では、本研究の主題（テーマ）を紹介し、本研究の基本的な構成となる主題を分割し副問（サブテーマ）とした部分の紹介をおこなう。本研究の主題は、国連開発計画の人間開発の概念とアマルティア・センのケイパビリティ・アプローチの間に横たわる溝を埋めるものであり、それを“乖離”とよぶ。そして乖離を解消する方法とはどのようなものであるかを示している。主題を分割した副問はさらに次の2つになる。第1の副問は、人間開発の概念とケイパビリティ・アプローチの“乖離”は、いかにして解消することができるか、第2の副問は、“乖離”問題を修正した本研究が提唱する人間開発の概念は、果たして貧困分析に対して現実にとどの程度有効か、を示したものである。第1副問は主に理論的研究を取り扱っており、第2章と第3章によって展開されている。また、第2副問は主に実証的研究を扱っており、それは第4章の一部で分析されている。

第1章では、開発経済学のパラダイム転換、人間開発にいたるまでの貧困認識の変遷、人間開発の概念に関する先行研究、などを整理する。そして、先行研究における不十分な箇所を見出し、その問題点を説明する。先行研究の問題点すなわち不十分な部分とは、人間開発の概念（国連開発計画）とケイパビリティ・アプローチ（アマルティア・セン）

との“乖離”について、解消すべきであるという指摘がなされているものの、いまだ解消には至っていなかった。この乖離はどうすれば解消することができるかという最も重要な課題が、未だに解明されずに放置されていたのである。この研究は、研究史における問題点と言っても過言ではないその“乖離”を埋めることによって、本論文の独創性を発揮することを意図したものである。

第2章では、ケイパビリティ・アプローチと人間開発の概念の比較を行い、両者の間に横たわる“乖離”が解消可能であるか否かについて分析をする。この分析によって、人間開発の概念とケイパビリティ・アプローチの間にある“乖離”問題の根源は、人間開発の概念がアマルティア・センの重要視する“貧困の構造分析”を希釈しているという点が明らかになった。この点を修正することによって、両者の間を隔てている“乖離”は解消可能となることが解った。

第3章では、第2章でケイパビリティ・アプローチと人間開発概念との間に横たわる“乖離”は解消可能であるとの結果を得たので、この両者の間にある“乖離”を解消するために、ケイパビリティ・アプローチの視点から人間開発概念を再構築することにした。この再構築によって人間開発の概念も貧困の構造分析を十分に行うことが可能となり、ケイパビリティ・アプローチと人間開発概念の、両者の間に横たわる”みぞ”すなわち乖離は理論的に解消されることになったのである。

第4章では、“乖離”問題を修復したこの研究が提唱する人間開発の概念が、貧困分析において果たして現実的に有効であるかどうかの実証研究を、カンボジアの事例をあげて分析する。分析の結果は、“乖離”問題を修正したこの研究の提唱する人間開発の概念が、カンボジアの“貧困の構造分析”を行うことができることを証明した。さらに、カンボジアにおける貧困問題の核心をも掘り下げて指摘することができたために、貧困の構造を分析することに有効であることが立証されたのである。

結論では、本論において分析立証された解決案を総合して、序論でも提起した本研究の問題意識への1つの解答を与えていることを結論付けている。すなわち、ケイパビリティ・アプローチの視点から人間開発の概念を再構築することで、人間開発の概念では希釈化されていた貧困の構造分析が明確にされ、人間開発の概念とケイパビリティ・アプローチの間に横たわる“乖離”を解消することができたと同時に、貧困問題を解く具体的な解決策を得ることができたことである。

審査結果の要旨

1. 研究テーマの設定について

筆者によると研究のテーマは「国連開発計画の人間開発の概念とアマルティア・センのケイパビリティ・アプローチとの間に横たわる貧困に関わる分析の“乖離”を解消する方

法はいかなるものか」というものである。そこでは、国連開発計画がセンの人間開発に関する理論を基礎としているという理解のもとに、その実践が不十分であり、かつ筆者としてはセンの理論があるべき姿であるとの前提に立脚している。

では、両者の間にはどのような問題があるというのか。要約すれば、「国連開発計画は人間開発の概念をもとに施策をおこなっており、人権問題や政治体制の問題などの貧困に関するさまざまな問題点や矛盾点を指摘しその改善を目指すべきだとしながらも、貧困問題に対する原因の分析には立ち入っていない」と指摘し（18ページ）、センのアプローチが優れている点は「貧困がうまれる仕組みを解きほぐせるようにしたことである」と理解している。

センのアプローチが優れているか否かは論者の判断であり、アприオリに断定することは出来ないであろうが、貧困問題に対処しようとするとき、もっぱら貧困の現象に注目するのではなく貧困構造の分析とその原因にまで遡って施策を講じようとする考え方には説得力があると言えよう。

なお、本論文では、理論研究に加えて、実証研究（貧困国であると認識されるカンボジアへの理論の適用）をも行っているところに特徴が認められる。

2. 研究の進め方について

本研究は、設定したテーマの背景となる開発経済学の研究史を概観し、人間開発にいたるまでの貧困認識をサーベイしている。いわゆる先行研究の確認作業を行っているわけであるが（第1章）、妥当な手順である。そのうえで、センの理論と国連開発計画が採用している理論それぞれの対比を行っている。後者においては、人的資本理論（人間への投資として教育を行い、教育は将来の生産性を上げるための投資と考える、つまり手段としての人間に注目する）と、ベーシック・ヒューマン・ニーズ・アプローチ（貧困層に焦点を当て、生きるために必要な基本的必需品を充足させようとする、つまり人間を受益者として扱う）が採用されてきたが、前者においては、貧困は単に所得が低いということではなく、基本的なケイパビリティ（潜在能力）が奪われた状態であるとし、潜在能力を改善することによって貧困から脱出できるようになることの追求に重点を置く。

3. 本論文の概要と評価内容

本研究の主題は、国連開発計画の人間開発の概念とアマルティア・センのケイパビリティ・アプローチの間に横たわる溝を埋めることであり、それを“乖離”とよぶ。筆者は、この乖離を埋めることこそが真の貧困問題を解決する鍵となると考える。そして、この乖離を解消する方法とはどのようなものであるか、を研究し示したものである。

主題を分割した副問は次の2つになる。第1の副問は、人間開発の概念とケイパビリティ・アプローチの“乖離”はいかにして解消することができるか、第2の副問は、“乖離”問題を修正した本研究が提唱する人間開発の概念は、果たして貧困分析に対して現

実的にどの程度有効か、を示したものである。第1の副問は主に理論的研究を取り扱っており、それは第2章と第3章で展開されている。また、第2副問は主に実証的研究を扱っており、第4章の一部で分析されている(論文要旨を参照)。

第3章は、本論文の、いわば血と肉である。センの理論で貧困を基本的潜在能力の欠如としてとらえるとき、「貧困は単に1つの要素の欠如状態によってもたらされるとは考えられない。すなわち、様々な要素の欠如状態が連鎖して困窮状態をまねくということである。」「貧困の構造分析とは、ある国の各種貧困の要素の欠如状態がいかなる連鎖的な構造を有し困窮状態にあるのかその全体像を明らかにすることである」(60～61ページ)。

このような理解に基づいて、筆者は「国連ミレニアム開発目標」に盛り込まれた貧困克服に関する「ゴールとターゲット」(52～54ページに記載)を分析する。それぞれのゴールについてターゲットごとに様々な要素の相関関係を抽出する。この作業は筆者の主観的な判断を反映させたものであろうが、本論文のページ数において50ページ弱に及び理論分析部分の半分に近い。国連開発計画の活動をセンの理論によって整理・補充することが可能である、可能になった、ということ論証しようとしている。これによって本論文のテーマに言う「乖離」が解消されるということを示そうとしている。ここで個別に細部を議論することは避けるが、1つの方向性を示していると理解することは可能である。

4. 本論文の独創性

開発経済学のパラダイム転換、人間開発にいたるまでの貧困認識の変遷、人間開発の概念に関する先行研究、などを整理し、先行研究に不十分な箇所を指摘して、その問題点を洗う。先行研究の問題点すなわち不十分だった部分とは、人間開発の概念(国連開発計画)とケイパビリティ・アプローチ(アマルティア・セン)との“乖離”について、解消すべきであるという指摘がなされていたにも関わらず、いまだ解消には至っていなかったことである。

人間開発の概念とケイパビリティ・アプローチの間にある“乖離”問題の根源は、人間開発の概念がアマルティア・センの重視する「貧困の構造分析」にあまり重点を置いていなかったという点である。この点を補充修正することこそが、言うまでもなく両者の間を隔てている“乖離”を解消可能とする。そのためにケイパビリティ・アプローチに視点を置き、人間開発概念を再構築することにしたのである。この再構築によって国連の人間開発の概念も貧困の構造分析を十分に行うことができることを立証し、ケイパビリティ・アプローチと人間開発概念の両者の間に横たわる「みぞ」すなわち乖離は、理論的に解消されることになったのである。

“乖離”問題を解決し改訂した筆者の提唱する人間開発の概念が、貧困分析において果たして現実的に有効であるかどうかの実証研究を、カンボジアの事例に当てはめて分析する。分析の結果は、筆者の人間開発の概念が、カンボジアの事例にも当てはまることを明らかにした。それに伴って、カンボジアにおける貧困問題の核心をも幾つか掘り

下げて指摘することができたために、筆者の人間開発の概念が貧困の構造を分析することにまさに有効であることを立証したのである。

理論の展開による記述を具体的な事例によって検証していることは、理解の度合いを高めると同時に理論の検証という側面で有意義である。「これまでの国連開発計画によるカンボジアの貧困分析は、貧困の各要素を数値化し、モニタリングしているだけの分析であり、カンボジアの貧困にとって重要な要素間のつながり等の問題点が明白ではなかった」が、本研究の分析が有効であると実証することが出来たと評価することが出来る。この研究の過程で筆者は一度ならず現地を訪問調査しており、評価することが出来る。

先にも述べたように、アマルティア・センのケイパビリティ・アプローチと、そのセンを踏襲したはずの国連開発計画の人間開発の概念との間の隔たり、すなわち“乖離”を指摘する先行研究はこれまでもあったが、この“乖離”を解消する処方を示した研究はなかった。本論文の特徴は、第1に、この処方を初めて示したことである。第2に、この“乖離”問題を埋めて修正した本研究の提唱する人間開発の概念をカンボジアに適用し、それを国連の概念と比較して、この概念が貧困分析にとって明らかに有効であることを検証したものである。以上2つの理由により、この論文には「独創性」があると判断されるのである。

5. 今後の研究課題

“乖離”に着目し、その溝を埋めるべく独自の人間開発概念を作り上げたことは評価に値する。いまのところこの概念をカンボジア1国に適用したものであるが、これからは状況の似た国々に順次適用して行き、より広範な基準となる概念を作り上げることが可能と思われる。こうした「独創性」をもとにした手法により、本研究は、個々の国々だけではなくより広く世界の貧困研究に貢献し発展させる可能性を秘めており、大いに「将来性」を期待できると判断する。

しかしながら、センの理論枠にとらわれて、理論展開の内容がセンの言う経済成長および国の発展と国連や外部支援に頼る構造になっていることは、自立するための途上国の発展構造を分析するには不十分なものを感じる。真の発展要素(ケイパビリティ)と構造を深く探求し、カンボジア以外の後進国にもこの概念を適用して行く術すなわち理論を模索し確立して行ってほしいと願う。

6. 博士論文としての評価

本論文の着眼点、先行研究の把握、論述の展開、人間開発と国連開発計画の問題点の抽出、その乖離をどうしたら埋められるかの分析、そして乖離に必要な要件を1つずつ挙げ細かく検討している。乖離を埋めた各要件を人間開発の概念に加えて行き、その理論が具体的に応用できるかをカンボジアに当てはめて実証している。その結果はこれまで国連開発計画では浮き彫りにできなかった貧困の課題を見事にクリアーしているこ

とを証明したのである。

以上の観点から、本論文は博士論文のレベルを満たしていると判断することが出来る。テーマの選定ならびに論考の進め方においても、自立した研究者としての資質を備えていると判断される。ただ、残された問題ないしチャレンジとして、本論文で踏み込んだテーマについて今後どのように踏み込んで行くのかについての方向性が懸念される。